

地塩

No.423

2021. 9. 12

目次

発行日 2021. 9. 12
 創刊 1926. 9. 10
 編集 蕃山町教会執事会
 発行人
 印刷人 山陽印刷(株)
 発行所
 岡山市北区蕃山町2-15
 日本基督教団蕃山町教会
 TEL = (086)224-1322
 FAX = (086)224-1329
 三井住友銀行岡山支店
 口座 普通 0962358

ペンテコステ 礼拝説教

2021. 5. 23

「口に笑いを、唇に歡びを」

ヨブ記八章一〜三節

牧師服部

修

フォーサイスという神学者が信仰における間違った考え方として、神への関係よりも、神の前での行動をより高く評価すること、と指摘します。すなわち、行為を信仰に先立たせ、実行を信頼に先立たせ、わざを礼拝に先立たせること、と。なるほど、神への関係よりも、神の前での行動のほうが分かりやすい。だからこそ人間は、信仰よりも行為を、信頼よりも実行を、礼拝よりもわざを先立たせる、という罪を犯すわけです。そしてフォーサイスは何をするかよりも、誰を信じるかのほうが根本的であり、より重要なことであると述べます。すべては信仰から始まる。すべてはイエスさまを信頼するところから始まります。信仰と行為にはこのような関係があり、信仰があるから行いがあり、行いがあるから信仰がある、ではありません。

その点でビルダドがヨブの発言を受けて言葉を発しますが、ビルダドは明らかにヨブの態度だけを見ており、ヨブの言葉になっていない信仰を洞察しようとしていないことがその記述から読み取ることができます。

確かにヨブの三章以降の言動は、そこに現れ出ていることだけで判断するなら「信仰深い」と誰もが明言できる

ものからはずれていると言えます。むしろ不信仰と見なされてしまったとしても仕方ないような言動をヨブは繰り返します。ヨブのいわばひねくれた愛の求めをビルダドは考慮していません。ある意味ビルダドは、とても真面目な人間なのだと言うことはできません。神さまに向かってわがままを言い、神さまに向かって駄々をこね、神さまに向かって挑発するようなヨブの言動をビルダドは神さまへの信頼の無い証拠、と見なしているからです。それゆえにビルダドの第一声はこうでした。「いつまで、そんなことを言っているのか。あなたの口の言葉は激しい風のようなだ。神が裁きを曲げられるだろうか。全能者が正義を曲げられるだろうか」(二〜三節)。

ビルダドは、神さまは正義を曲げられることはないという視点で議論を展開いたします。神さまの正義は絶対。このことについて異を唱える信仰者はおられません。ヨブもそれは同意します。事実、神さまの正義が絶対であるからこそ、罪人である私たち人間は、自分の努力によっては得られるはずのない神の義を、ただイエスさまを信じることによって与えられたことが恵みだと信じられます。私がイエスさまを通し

て与えられた義が、もし不完全な義であつたなら「わたしが救われた」との告白も不完全なものになるし、そもそも救いが不完全なものになってしまいます。しかし神さまの義が絶対であるから、私が救われたとの事実は私の不完全さに由来しているのではなく、神さまの正義の絶対性に由来しているゆえに、私が救われているという事実は何があっても揺らぐことの無い事実として、信頼して受け取ることができるようです。正しいことを言っているはずなのに間違った方向にビルダドが向かってしまった理由を彼の発言から垣間見ることが出来ます。例えば四節。ここにはヨブの子どもたちのことについて言及していますが、この発言は明らかに聖書が否定する因果応報的な発言です。そしてビルダドの発言は、子どもを失って悲しみの中にあるヨブに対して追い打ちをかけています。つまりビルダドはヨブの罪を見てはいても、ヨブの苦しみを見ていない。しかも、一章においてヨブが、子どもたちが心の内に罪を犯したかもしれないと考えて犠牲をささげていたことを思い出すならば、ビルダドの発言はあえて言うならばヨブの全否定です。苦しむ者に苦しみを指し示すことはあっても苦しみを加えることは愛ではありません。ビルダドがヨブに伝えようとしたことは、お前が変われば神は態度を変えてくれるだろう、なのです。

この発言も一見もっともな発言に思われます。しかしイエスさまはこのように言われます。「父は悪人にも善人

にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」。ビルダドの発言はイエスさまの言葉と違っていることが分かります。神さまは人間が変わらなくても恵みをくださるし、何なら、人間が変わらなくても御子を十字架の上に死に引き渡して救いを与えてくださったのです。この救いと恵みの事実から見ると、二〇〇二一節に主張されている、良いことは神に従う者に、そして悪いことは神に逆らう者にとの主張が、正しい者にも正しくない者にも、と語られたイエスさまの言葉と違うことがはっきりします。ヨブは苦しむ者として、神に逆らったから苦しんでいるのだ、という主張と戦っているのです。

確かにビルダドの主張は単純で分かりやすいものです。けれども、世の苦しみの現実はいつもビルダドの主張するものばかりではありません。苦しみの問題は、単に神に逆らったか従ったかだけで測られるものではありません。誤解を恐れずに言えば、神に逆らっても平穏な人生を送る人もあれば、神に従っているのに労苦に満ちた人生を送る人もいます。そして人間的な視点からするなら、神に逆らっても平穏な人生を送れる方が幸せではないかと思われる。だから神を求める前に自分の幸いを求め、神を求める前に自分の願いが成就することを求める。しかしそれは一時的な喜びを求めて永遠の喜びを失う愚行であり、また、一時的な楽しみを得ることで永遠の滅びを引き受ける悲惨である、と聖書は繰り返し

示しているのです。

前述のとおりビルダドの主張は分かりやすいものではありませんが、断罪するばかりで苦しみの中に入ることをせず、断罪するばかりで愛そうとしないう人間の罪が明らかにされます。お前が悪い、あなたが悪い、と主張し合うところには何の平和もありません。お前が変われば状況が変わる。そう主張するだけで自分が変わろうとしない傲慢さがビルダドの主張の背景にはひそんでいいる。そして実は私たちもその罪の毒に侵されてしまっている。だからこそビルダドの主張に従う限り、口に笑いを満たし、唇に歓びの叫びを満たすことはできません。それでは口に笑いを、唇に歓びを満たすためにはどうしたら良いのでしょうか。

ところで今日はペンテコステの日となっています。復活されたイエスさまが天に昇られ聖霊が降ったこと、そして聖霊なる神が私たちの世に教会として来てくださったことをお祝いする日です。そして使徒言行録に記されている聖霊降臨の記述を見るとそこに喜びが描かれているのを見ることが出来ます。今日は使徒言行録の二章からではなく一〇章四四節以下を選びました。ここは異邦人のペンテコステとも呼ばれる箇所です。そしてここに賛美が満ちているのを見ることが出来ます。つまり私たちの口に笑いを、唇に歓びを満たすのは世にある何ものでもなく、聖霊、つまり神さまが与えてくださる、ということなのです。ビルダドがヨブに向かって、お前が変われば笑

えるようになるかと告げたこととは対称的に、笑いも喜びの神さまが与えてくださる、聖霊が満たしてくださると言われている。私たちの内側からは笑いや歓びは出て来ない。あるいは私たちは何とかなして内側から笑いや歓びをほり出そうとして疲れ果て、傷つき、倒れてしまうのです。だから笑いも歓びも聖霊が与えてくださると信じるのなら、努力してしばらく出すのではなく、私の口、私の唇には私の状況如何にかかわらず、聖霊によって笑いや歓びがもたらされると期待できる。そして聖霊によってもたらされる笑いや歓びは、私たちがしばらく出すものとは異なって枯渇することがないのです。神さま由来の笑い、神さま由来の歓びに、聖霊は私たちを与らせてくださるのです。

あるいはヨブが求めていた笑いと歓びはこれであつたと言えるでしょう。そうであるならペンテコステの出来事を通してこの笑いと歓びを示されまた与えられている私たちは幸いな存在なのです。

もちろん、日々の生活の中で笑いが消えることも、歓びが失われることもあります。けれども私たちには笑いも歓びも、聖霊によって与えられる、また与えられ続けるといふ希望が約束されています。だからこそ先ず神を求め、何があっても神を求め、そこから与えられる笑いと歓びに満ちて生きて行きたいのです。ペンテコステの出来事はそれを約束しています。この恵みを信じて今日からの歩みを私たちも歩み出したいものです。